

## 九州派 作家のことば

■ 私にとっての九州派とは、いまだに走りやまない疾走する田舎馬車である。思えばオチオサム先生の発見、メチエとしてのアスファルトは道路を作る時の材料であった。それ故、当時のメンバーは道路なみの速さと道路なみの固さと道路なみの人混みの中で個性など考えもせずダダッと突っ走った。それ故、下品であった。アスファルトの黒光りは三池の、大正炭鉱の石炭の黒光りに肖ていなくはなかった。それにもまして九州には巨人伝説がある。例えばそれは玄洋社であり夢野久作であり、三池であったり、いまも新しくも古いものは大正炭鉱であったり上野英信先生の死であったり、世界的には水俣公害であり、長崎のピカドンである。その谷間に生えた雑草が“巨人を夢見る”まさに白日夢である。

桜井孝身『九州派展-反芸術プロジェクト』(図録)

1988年福岡市美術館 『九州派大全』に再録

■ 九州派会員の変革と創造への熱意とエネルギーは凄まじいものがあつたが、前衛美術運動としての理論や戦略の構築への関心は薄く、会の分裂や会員の離合集散も理論闘争の結果ではなく、人間関係のもつれや感情的摩擦であつた様で、そのため徒らにエネルギーを浪費した感がある。もっと真摯に会員相互の作品批評や論争にエネルギーを集中できたならば、優れた作品が生み出されたのではないかと、まことに残念である。

山内重太郎「元『九州派』への質問に答えて」、『九州派展-反芸術プロジェクト』(図録)、

1988年福岡市美術館 『九州派大全』に再録

■ 大雑把にいうなら九州ではじめにアンフォルメルを波をかぶり、やみくもに泳がされたのが連中(九州派のメンバー)だったといえまいか。自らの運動を論理化するのは不得手だったが自己流の泳法を編まねばならなかった。これは戦後の一つの通過点である。なにをしてもいい、なにをしてもよいかわからない、この始末のわるい場所がぼくの二番目の学校といえそうだ。

宮崎準之助「尻馬の弁」 『九州派展-反芸術プロジェクト』(図録)、

1988年福岡市美術館 『九州派大全』に再録

■ 恋にダンスに映画に絵とのぼせていた私は、九州派の会合のたびに俺を選ぶかあいつを選ぶかで激論し、しまいには暴力沙汰が始まるのが不思議であった。今でも良くわからないが、作家精神の方が作品より重要だといっていたのかなあ、とにかく相手の内臓の中まで見極めなければ承知しない者同士のつきあい方はあなるのかもしれない。その度に、私の頭上に弓矢が落ちないことを祈りながら次第に自分も強くなっていった。つまり九州派は私にとって、反面教師のいる勉強塾だった。

田部光子「遅すぎて、早すぎる、この九州派展」 『九州派展-反芸術プロジェクト』(図録)、  
1988 年福岡市美術館 『九州派大全』に再録

■ 1950年代後半から60年代前半にかけて、日本各地に前衛的な美術グループが簇生した時期がある。(中略)その中でも福岡の〈九州派〉ほど、深い地層から熱いマグマが噴出するようなエネルギーを感じさせるグループはなかった。そこにはいくつかの原因があるが、第一に、もともと中央志向や海外志向ではなく、あくまでも九州人の特徴を強調しながら東京に殴り込みをかける姿勢、第二に、モダニズムを拒否して、芸術の変革と社会の変革を統一しようとする空気、第三に、だれが代表でも親分でもなく、多士済々でくせものぞろいのメンバーが、たえず星雲状にひしめきあったこと、などがあげられるだろう。

針生一郎「九州派顛末記」、 『九州派展-反芸術プロジェクト』(図録)、  
1988 年福岡市美術館 『九州派大全』に再録

■ 私はまだ自分を前衛だとは思っていない。私をも含めて、九州派全体がそうであろう。私達は新しい素材を使用し、目先の変った絵を描くことをもって、ただちに前衛だというふうには考えていない。そこには必然的に作家の精神内容が要求されなければならないからである。私達はそういう意味から、いま理論の勉強を続けている。そして私は、私の絵に、生々しい物質のもつ、物質そのものの不可思議な存在感、自分の生命によって捉えた「もの」そのものの言葉を、自分の最も高次な方法によって語らせたいと思っているが、さらに、思想性をもってその裏づけを行いたいと企てている。そして、私がいま、一番願っていることは、九州派が新しい美術の理論を確立し、本当の前衛運動を展開することであり、それがイズムにまで高

められ、まだ同時に、いままで前衛を持たなかった九州に、それこそほんもの前衛を打ちたてたいということである。

山内重太郎「前衛の場から」、  
『芸林』1958年7月号 『九州派大全』に再録

■ 九州派は、前衛グループとしては、まだスタートしてはいない。いうならば、スタートラインの上に立ったばかりのところで、従って、前衛としての理論は、まだ何も確立されていないのである。・・・

俣野衛「九州派の意見」、  
『芸林』1958年7月号 『九州派大全』に再録

■ 九州派の原理が運動としての組織性を喪失したような事態にあつて「反東京」「反芸術」運動のカルテルにまどわされることなく、ひたすら強烈な個我存在を樹立していくような—そこでは常に、真の敵を見間違ふことのない否定作業を遅滞なく作家主体の側から起して行かねばならない—ということは言ってみれば当り前のことでもあるが、それはあらゆる組織性を喪失しうる集団には「運動」カルテル「前衛」トラストは無縁だということ—。ある意味では専門化した芸術の運動はありえないということでもある。ぼくらがそこから外されていくとき「中央」は無化され、「反芸術」もまだ観念過剰のお手玉遊びになってくるだろうはずだ。九州派がもし芸術運動となりうるならば「反」も「前衛」も画家の限定を越えたところにしかない。そこには東京を円心とした「地方」で見れば不毛があるだけかもしれないが、いわばこの状況不在のそのものをいかに状況へと転回して『地方』を展開しうるか、もはや芸術行為にのみ依拠される問題ではなくなっている。かかる領域に拠点するところで芸術の運動もまた可能であるのではないだろうか。

働正「九州派一九六三—<英雄たちの大集会>以後—」、  
『九州派 7』1963年10月 『九州派大全』に再録